The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	研究室の思い出
Author(s)	柏木, 哲夫
Citation	生老病死の行動科学. 2014, 17-18, p. 3-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/36361
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

寄　稿

研究室の思い出

（金城学院大学）柏　木　哲　夫

私が阪大人間科学部にいたのは1993年から2003年までの10年間であった。その間の思い出などをまとめるようにとの依頼を受けた。当時書いた文章をパソコンから引っ張り出してみると、やはり退官直前のものがまとめとしては適当であろうと思った。ここでは三つの文章を紹介したい。

１）年報のまとめ

53歳の時に、ホスピスという臨床の場から、大学という教育と研究の場に身を移した。63歳の定年まで10年あるので、一仕事出来るかもしれないと思った。結果的には、半仕事くらいで終わった。もう少し居座ることが出来れば、残りの半仕事ができるかもしれないと思うが、文字通り定年は定まっているので仕方がない。平成16年に始まる大学の独立行政法人化の前に定年を迎えることは幸せなことですよと言う同僚教授の言葉を素直に受け止めることにした。

赴任以来の年報をひもといてみるといろんな思い出がよみがえる。

一言で言うと10年はアッと言う間に過ぎ去ったという感じである。年報にそって、振り返ってみたい。

・大阪大学臨床老年行動学年報１（1996/3）
第１報は1993年の赴任後、３年目に出た。11の論文が掲載されているが、平井啓助手の「癌告知における“取り入れ”と“投影”の働き」が光っている

・年報２（1997/3）
講座充実期を迎え、論文のレベルが向上した。坂口君の悲嘆研究、大橋君の老人の時間意識の論文がいい

・年報３（1998/3）
講座がスタートして５年目、院生も10名（修士７、博士３）になった。講座が東館に移り、これまで三つの階にバラバラだった部屋が１箇所に集まり、コミュニケーションが良くなった。

・年報４（1999/4）
巻頭言を見ると、卒業式の日に、学生さんを自宅に招き、そこで卒業証書を手渡していたことがわかる。1998に朝日社会福祉賞を受けたことが、ややうれしそうに書かれている。

・年報５（2000/6）
2000年４月に大学院重点化が終わり、大学院の正式の名前は大阪大学大学院人間科学研究科人間行動学講座臨床死生学研究分野となり、院生は15名になった。

・年報６（2001/7、臨床死生学年報と改題）
大学院重点化とともに研究活動が活発になり、共同研究も増え、年報の改題とともに執筆者が25名に急増した。

・年報７（2002/7）
私が最後の巻頭言「10年間の締めくくり」を書いた。これが少し光っている。（自己肯定

が強すぎるのが欠点）

２）「10年間の締めくくり」

2002年５月29日、63歳になる。来年の３月で定年である。アッという間の10年間であった。53歳の時大学の教官にならないかとの話があった。臨床医としての道を考えていたので、53歳でキャリアを変えるのは人生の誤算（53）ではないかと思った。友人の一人がこれは誤算ではなく、ゴーサイン（53）だと思うと言ってくれた。これがいたく気に入って決断した（もちろんこれだけで決めたわけではないが）。

10年間の教官生活は誤算ではなかった。人間科学部にお世話になって本当によかったと思っている。何よりも視野が広がった。医学という狭い専門分野から人間科学という、とてつもなく広い領域で多くの研究者と接することが出来たのは幸せであった。それに講座の中で、いいスタッフと優秀な学生に恵まれた（ごく少数の例外はあったが）。

62歳の一年間、いろんなことが起こった。「巻頭言」を書くのもこれが最後なので、お許しいただいて、少し私的なことも書かせていただく。先ず孫が二人誕生して、私も「オジイチャン」になった。まだ実感は湧かないが・・・。それに学位を二つ（医学博士と人間科学博士）いただいた。留学その他で医学博士の学位をとる機会を逃し、もういいかとも思ったが、定年１年前の区切りにと挑戦した。学位論文を提出する前に英語の試験を受ける必要がある。教務に行って「学位のための英語の件ですが・・・」と言うと、「御苦労様です、今年は先生が出題ですか」と言われ、気恥ずかしい思いをした。

本も二冊出版した。「ターミナルケアとホスピス」（大阪大学出版会）と「癒しのユーモア」（三輪書店）である。後者はここ数年取り組んでいる（？）川柳を土台にした私流のユーモア論である。意外に評判がよく、初版は数か月で売りきれた。この一年を川柳でまとめると「六十二学位二つに孫二人」ということになろうか。

大学での生活も後一年をきった。とても居心地が良いので、許されればもう少し居座りたい心境だが、定年延長論には間に合わないので仕方がない。幸い、昨年10月に恒藤暁助教授が赴任して下さったので、後は安心して任せられるので、これもとても有り難いことである。講座も院生15名、学部生16名で、部屋のやり繰りがかなり窮屈になっている。研究意欲は盛んで、協同研究も進みつつある。４月には初めての試みで、学外で１泊のFAT（Fellowship and Academic Talk）という院生だけの集まりをもち、とても有意義であった。

2003年３月５日～８日に大阪国際会議場で「第５回アジア大平洋ホスピス大会」が開かれる。私が会長、恒藤先生が実行委員長で講座の皆さんにも協力していただいて準備を進めている。国内から1000名、海外から300名の参加を予定している。その他、「退官記念論文集」の発行や最終講義の準備など、10年間の締めくくりに忙しくなりそうである。健康が守られて、まわりの皆様にご迷惑をかけることなく締めくくりたいものと願っている。

2002年５月
教授室にて

３）御礼と御挨拶

本日は年度末の御多忙中にもかかわりませず、私の退官記念の会に御出席下さり、ありが

とうございました。厚く御礼申し上げます。淀川キリスト教病院から大阪大学に移りまして、臨床老年行動学講座を開設し、十年間学生の教育と研究に従事できましたことは、皆様方の暖かい御励ましと御支えがあった故と心から感謝致しております。講座の研究活動のまとめとして、退官記念論文要約集・業績集と最終講義の要旨（阪大Now 十ページ）を御届けいたします。

四月からは名古屋の金城学院大学人間科学部に移り、臨床ケア学、ホスピス論等を担当する予定です。淀川キリスト教病院ホスピスでの臨床も続けさせていただくことになっております。日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団、死の臨床研究会、全国ホスピス・緩和医療ケア病棟連絡協議会、日本心身医学会、日本緩和医療学会等の仕事も今しばらく継続する予定です。これまでのご支援、ご鞭撻に感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬ御厚情をよろしくお願い申し上げます。

本日は誠にありがとうございました。

2003年３月23日

柏木哲夫

＜今後に期待すること＞

幸いなことに、研究室には多くの優秀な学生さんが集まる。研究室を巣だった人たちは社会の様々な分野で活躍する。卒業生（この言葉が適当かどうかは別にして）が卒業後も交わりを継続し、協力しあえる「しくみ」が構築されればいいのにと思う。単なる同窓会ではなく、もう少し「知の協力」と言えるようなものである。研究室と研究室を巣だった者の協力で、この分野におけるユニークな働きができればと思う。